

受講番号 19076

学校名

北陵中学校

氏名

小笠原 幸子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 2年A組

生徒数 32 名

科目名 2年生

単位数(授業時数) 3 時間

使用教科書名 NEW HORIZON English Course 2(東京書籍)

クラスの様子・特徴

あいさつや音読練習は、毎時間大きな声でできており、積極的な発言が多い。その反面、集中力が持続しないため、活動内容の創意工夫が必要である。積極的に会話ができる生徒が多いが、書くことを苦手としている生徒もいる。

問題の確定

標準学力検査の「書くこと」の正答率に厳しい結果が出ており、授業で半数の生徒が「書くこと」を難しいと感じている。

予備調査

A 授業の観察

英文作成は、物が対象であれば、書きやすかったが、日記や将来の夢がテーマの時は、より表現力を問われるので、難しかったようである。まず日本語の作文の表現力が弱く、語彙が少ないので、毎日つけている学級の個人記録ノートの日記の指導と英語・国語の教科両方からの指導が必要である。

B 生徒による授業評価

英語の授業に関するアンケートを取ると、「授業の中で難しいと感じる場面」は、生徒全体の56%が「書くこと」と答えている。それに対して、「楽しいこと」は全体のわずか19%にすぎなかった。

C 学力データ

4月24日に実施した標準学力検査では、領域別正答率の「聞くこと」がほぼ全国平均に達しているのに対して、「書くこと」は厳しい結果が出ている。観点別の「表現の能力」を高める指導が必要であることがわかった。

リサーチ・クエスション

教師や辞書の力を借りながらも、表現力豊かでコミュニケーションに必要な正確な英文を5文書くことができるようになるには、どのような指導方法が適切であるか。

仮説・実践・検証

仮説1

漢字と同じで、読み方がわからなければ、書くことはできない。単語や基本文の音読ができれば、書くこともできるであろう。[音読]聴覚⇒脳

実践1

(1)授業の始めに(授業開始2分前から)、シャドウイングを行い、ペアで教えあいをした。1回目は英語⇒英語、2回目以降(あるいは英語⇒英語が読めるようになったら)は日本語⇒英語。終わったペアが拳手をするにより、スピードも競わせた。(2)新出単語や基本文の音読練習に、パワーポイントを利用し、またまごとに音読練習をした。

検証1

(1)授業開始前にシャドウイングをする習慣ができ、早め席について始めることができた。英語のリーダーが中心になり、一人が3人をつれて読む練習をしている姿も見られた。今まで消極的だった生徒もできるようになり、100%の参加率であった。(2)パワーポイントを利用することにより、生徒が興味を持ち、更に大きな声で音読できた。またまごとの音読は、意味をつかむためには効果的であった。アンケートを取ったら、99%の生徒が意欲的に音読ができたと答えている。

仮説2

単語を知っていても、語順がわからなければ文は作れないので、語順を理解すれば、文をつくることができるであろう。[語順]視覚⇒脳

実践2

(1)パワーポイントを利用し、またまごとに音読し、ノートに3回ずつ書いた。書けた生徒から拳手をし、スピードも競わせた。(2)国語の授業でもこの方法を利用して文を作っているそうだが、接続詞のif, when, becauseが出てきたときに、文の前半と後半を分けて2つのグループが作成をし、時間を決めて、意味が通じる文になるように、自分のペアを探して、教員の前で読み、文をつなげた。

検証2

(1)パワーポイントを利用し、またまごとに教師の日本語を英語になおす音読を続け、音読の後、自主学习ノートに一気に書く活動を行うことにより、目で見て理解し、そして書いて確かめて定着できた。(2)文をつなげる活動だったので、文の仕組みや意味を理解することができた。

仮説3

辞書を引くことが習慣化すれば、受け身の学習ではなく、自ら進んで知ろうとする気持ちが芽生え、語彙の数も増えるであろう。[語彙の数]視覚⇒脳

実践3

パワーポイントと辞書を利用するため、2学期は図書室で授業を行った。英語の授業の雰囲気づくりにこだわり、ペアやグループ活動がしやすい形態を作った。

検証3

英作文の時には、辞書を手元に置き、引く習慣がついてきた。辞書を引くのも難しい生徒には、虫食い文を提示するなどのヒントを与えることにより、文の作成ができた。班形態で授業をしているので、自然と班内で教えあいをする姿が見られている。アンケートの結果は、学年の97%の生徒が5文作文の目標を達成したと答えている。

研究の成果

書くことに抵抗のある生徒が進んで書けるようになった要因は2つ考えられる。1つ目は、視覚に訴えることで興味・関心を持ったこと。2つ目は、書き終えると拳手をするのでスピードを競うようになり、楽しく書く活動ができるようになったことである。また、教科書の『Multi Plus』を使い、3段階に分けて作文をした。①ヒントなし。②キーワードを与える。③()抜きパターン文提示。教師は赤ペンを使わず、鉛筆でチェックをし、生徒が間違いを恐れぬよう配慮した。その結果、2学期の終わりには、5文作成は学年の97%の生徒が授業時間内にできるようになった。書く力をつけるために、第一段階として実践した授業開始2分からのシャドウイングは、授業規律が徹底し、生徒同士でやるのが効果的であるということが明確になった。

今後の授業改善の課題

課題は、パワーポイントを利用できる前向きな机の配置のある教室の確保と、生徒同士の関わりを深める活動を随時入れていくことである。2学期に実践したパワーポイントを利用した活動は、更に改良を加えて継続していく。また、5文作文は作成後、ALTの前で発表と質疑応答ができるようにして、動機付けを明確にすることで意欲的に活動できると思う。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-862-0280